

## 編集後記

毎月8～9編の査読論文が黒猫宅急便で次々に届けられる。またかの重い気持ちになる。反面、今月はどんな論文が来ているのかの期待感がある。昨年10月から本誌の編集委員を拝命した。卒後5年の頃、本誌に投稿して丁寧に査読され、戻された思いでが昨日のように思い出される。今でも編集委員会の雰囲気は本誌を質の高い最高の邦文学会誌にしようと強い意気込みである。そして若い人のための登竜門であるとのスタンスは堅持している。従ってこの論文を何とか採用してあげたい。そのためには編集委員会の査読評価をどう著者に伝え、より良き論文に仕上げるようにとの努力は惜しまない。21,973名の会員の会誌であり、交流の場であるからである。さて今月号には4題の原著論文と14の症例報告が掲載されている。それぞれ平均1.7回、12回の加筆修正のあと採用された論文である。小子の論文査読の方法はタイトル、図表、要旨の順でまずみて、本文に書かれているであろう内容を予測・期待しながら、澄心にじっくり本文を読む。つぎに投稿規定にあっているか、引用文献の号数、ページなどの間違いチェック、さらにこの論文に必要な追加文献は何か。そして査読評価に入る。心組は何とか投稿者の努力を評価し、採用させたい、どうしたら良きかに尽きる。原著論文は英文雑誌投稿への風潮が近年特に強い。6カ月の査読経験からの印象では、まず邦文論文を書く習慣をつけ、論理の展開などの一定の方式を体得すべきである。そして英文論文の書き方をマスターすべきと思われる。さらに強調したい点は30歳代前半までに論文を書く習慣を持って欲しい。それ以降は職務の立場上それほどの余裕はなくなってくる。本誌に投稿された論文を編集委員会では以上のような配慮で対応しており、編集委員会は投稿論文に磨きをかけてくれる指導教官の立場と理解して頂ければ幸いである。本誌の質の向上を求めながら、また来月の黒猫宅急便が楽しみな日々である。

(神津照雄)